

屋敷地共住集団と家族圏

口 羽 益 生*・前 田 成 文**

Multihousehold Compound and Family Circle

Masuo KUCHIBA* and Narifumi MAEDA**

This paper aims to clarify the nature of the family in bilateral societies in Southeast Asia by reviewing the late Dr. Koichi Mizuno's studies on "multihousehold compounds" in Northeast Thailand, in comparison with kin groupings among Kedah Malays.

In his early analysis, Dr. Mizuno grasped the multihousehold compound as an extended family, but gradually he revised this concept. Later he analysed familial forms from the viewpoint of cultural pattern, comparing Thai and Japanese families, and as a result characterized the Thai family pattern as a radial extension of core kin combined with dyadic relationships.

Anthropological studies on the Thai family have in

general depicted it in one of two ways: as a non-group-like cluster of dyads, or as a social group with a clear-cut boundary. This difference, we believe, is partly attributable to regional differences between the areas where field work was conducted, but also derives from the viewpoint adopted, as exemplified in the locus of Dr. Mizuno's career.

This paper presents the view, from a comparative perspective that overrides this difference, that the family among Thais and Malays is no more than a social circle of interwoven dyadic relations which, because of its very flexible nature, may intrinsically take a variety of grouping patterns, depending upon circumstances.

I は じ め に

故水野浩一教授のタイ農村の社会組織のモデルの中核をなしているのは、「屋敷地共住集団」あるいは「屋敷地共住結合」と呼ばれる、土地を契機とした近親の「生産共同体」の存在である。他方、マレー農村にもタイ農村と同じような特徴をもつと考えられる近親の集合体が見出される。この集合体の核的組成形態を、坪内・前田[1977]は家族圏という文化的に捉えられるカテゴリーでもって理解

しようとした。もっともマレー農村の場合、かかる集合体の特徴を理解するには、家族圏と親類 (kindred) の概念の関係をも明確にしておく必要がある。本稿においては、まず、水野¹⁾の屋敷地共住集団およびその周辺の諸概念の性格を編年的に整理し、それと最近のタイ研究者の所説を比較検討して、タイ農村における屋敷地共住結合の性質を明らかにしたい。次いで、ケダーにおけるマレー農村の資料を用いて、タイとマレー農村の事例の異同を明らかにし、東南アジア農村社会における家族結合に関する特殊性の理解と普遍性の摘出の作業へのパースペクティブをえたい。

* 京都大学東南アジア研究センター (客員部門), 竜谷大学文学部; Visiting Scholar, The Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University, Faculty of Letters, Ryukoku University

** 京都大学東南アジア研究センター; The Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University

1) 以下、アカデミズムの慣例に従い、敬称を略す。名前は、本文中の文献引用形式と同じく、人格ではなく、その人の論文あるいは論文群を指す。

II 屋敷地共住集団

II-1 水野の最初期の論文（第1回のフィールドワーク直後に執筆）では、単なる世代区分による家族形態を示すだけでは調査村の実態が把握できないとして、調査村の農家126世帯を二つのグループに分ける。第1は、「生産と消費の共同体」としての家族、すなわち、生計をともにする1世帯1家族であって、核家族（48世帯）、拡大家族（33世帯）、あわせて81世帯ある。第2のグループは、世帯を異にする45家族が「生産面における共同関係」を軸にして19の親族集団を構成している[水野1965a: 26]。後者の親族集団がのちに屋敷地共住集団と呼ばれるものであるが、引用論文では、「家族の特殊形態としての親族集団」[同上論文: 27, 35]として、その構成家族である「親の家族」（世帯）を「正戸」、子供の「夫婦家族」（世帯）を「貼戸」と名づけている。正戸・貼戸の名称は、ある意味では2世帯の関係を象徴的にうまく表現しているが、この用語は引用論文に使われただけで、以後使用されなくなる。同時期の他の論文では、正戸・貼戸をあわせたものを「世帯共同体」[1965b: 54]ともしている。「共同体」の語ものちの論文では使われなくなる。

名称の是非はともかくとして、のちにより明確になる屋敷地共住集団の特徴はほぼ1965aの論文に出ているが、本項ではそのうち2点だけを指摘しておこう。まず第1に、家族形態としての核家族を単純に「親と未婚の子供からなる形態とその変形」として計算すると、非農家を含めた全体の世帯（家族）数132のうち、71%（94例）を占める。しかし、正戸と貼戸とからなる親族集団を、「世帯」は別にしてはいるが、家族周期（引用論文では「家族の輪廻」）の上でいずれの家族も通過せざるをえない「家族の特殊形態」として、一つの家族として計算すれば、核家族率は48%にな

る。すなわち、94の核家族のうち、独立して核家族世帯と呼べるものは48例にすぎず、残りの46世帯は19の「特殊形態」にまとめられ、その19を含めて、拡大家族と呼べるものが52例になる。水野は核家族以外を拡大家族として分類しているが、ここで使う「拡大家族」[1965a: 26]はいわゆる生産と消費を共同にする世帯と、消費は別々であるが生産面では共同関係にある複数の世帯群との二つを含むものである。後者では、「家族」は必ずしも同一の「世帯」でなく、複数の世帯にまたがってよいと理解されている。他方、屋敷地の所有分布[同上論文: 18, 表8]をみると、村内で屋敷地を所有していない世帯は12世帯にすぎない。そうすると貼戸26世帯のうち14世帯前後²⁾はすでに屋敷地を相続しているのか、何らかの方法で入手していることになる。いしかえれば、貼戸の中でも、親の屋敷地の中に家を建てて親の依存度が高いものと、自分の屋敷地をすでに所有している比較的独立した段階にあるものとがあることがわかる。

調査村では、屋敷地はなくとも自分の家はすべての人が所有（例外は2例）していて、村内の132の家屋には「世帯を異にする家族」[同上論文: 25]、すなわち、1世帯1家族が住んでいる。この場合、家族と世帯とが本調査村ではほぼ同義にとられるということが言外に含まれているようにみえる。しかしながら、上述の拡大家族の場合は、世帯が別であっても、まとめて1家族として分析的に取り扱われている。

したがって、正戸と貼戸との関係は、子供夫婦家族が親から分離していく過程において、完全に分離する前の、親に依存している時期の親族関係として捉えられている。貼戸は親

2) 表8は非農家を含む132世帯の集計であるので、屋敷地非所有の12世帯が農家の貼戸であるか否かは不明。なお、世帯・家族などの用語は、できるだけ引用文献に即して用いているので、その差異に注意していただきたい。

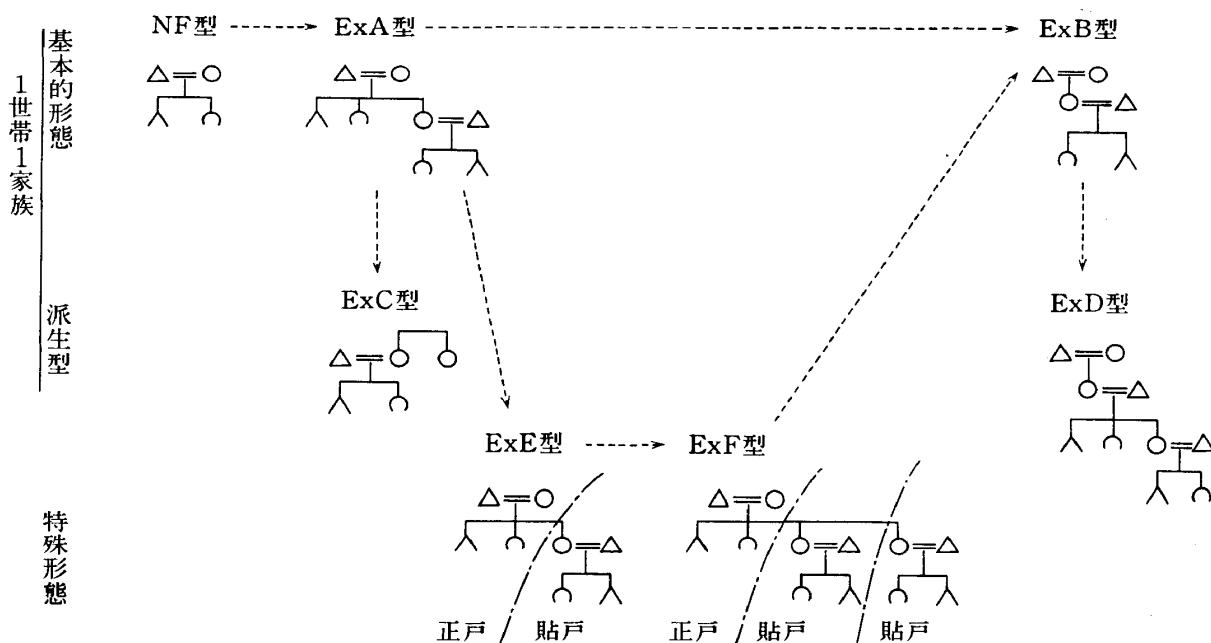
(正戸)の田畑を親と共同で耕作し、その収益を親と共同で消費する「親族共同体的農業従事者世帯」である。したがって、核家族率について言及されたのと同様なことが小作農の比率についてもいえる。調査村で自作農が数的に少ないのは、親族共同体的農業従事者世帯の主たる構成部分である「農地を所有せず、経営面積もあきらかでない農業従事者」(17世帯)[同上論文:20]が村において存在するからである。これらは「小作でもなく、近代的な農業労働者でもなく、その経済的依存関係は親族関係のうちに吸収され」[同上論文:35]ている。

引用論文においては上述したように、拡大家族、正戸+貼戸、親族集団、親族共同体などが同じ現象の説明用語として出てきており、調査途次の報告ということもあって、データに引きずられているという面もみられる。この時期においては、水野は家族の特殊形態としての親族集団ということばを使用しているが、タイ人の間では「家族やそれ以上の親族集団の連続性や全体性を示す意識は存しない」[1967:90]ことを確認していることに注目したい。

い」[1967:90]ことを確認していることに注目したい。

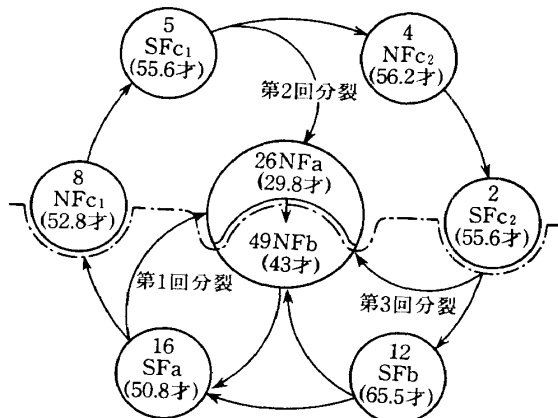
II-2 水野の1965aの論文で示された家族の輪廻は、輪廻ということばを使っているが、その模式図の内容は形態分類の域を出るものではない(図1参照)。これを家族発展段階の「輪廻」として、より明確に図式化したものが図2[1968a]である。

まず、1965aの論文と違って、モデルがサイクルとして捉えられている。完相としての円であるので逸脱的なタイプを円の中に取り入れることは難しいが、それだけに輪廻の類型は明確になる。夫婦と未婚の子女からなる核家族が、欠損形態を含めて、84例[同上論文:246]³⁾あるが、それを「家族の周期的発展段階と社会経済的意味」から3種類に分ける。すなわち、第1段階は、生家に頼っている親族労働者(農地を所有せず、たいていの場合、妻の両親の田畑で働き、生計を維持)ないし実質的自作農(相続分の一部ないし全部を妻の両親から委任され、その農地で生計



出典：水野[1965a:27]。配列の仕方の変更、矢印は引用者による。

図1 家族形態



出典: 水野 [1968a: 247]。

図2 家族周期

をたてている家)の家族(NFa)であり, いわば家族の新生期といえる。第2には, この新生期核家族が親から生産の面で独立し, 相続も完了した核家族の成熟期(NFb)が区分される。この区分は, 水野のきわめて重要な指摘の一つであり, 一般に核家族的世帯として一括処理されるものを, 階層区分の上で新生期と成熟期とに明確に分けて捉えている。第3段階としては, このあと子供たちが結婚することによって, 一時的に子供夫婦と同居するステム・ファミリーとなったり, 子供夫婦が別居していったあとの核家族となったりすることが繰り返される。この子供家族分出の時期の核家族は, 子供の場合は上述の新生期NFaになり, ひとりの子供が分出していった子供が結婚するまでの親の核家族は, 分出期の核家族NFcとなり, NFcはNFbよりも階層的に上位にランクされることが示さ

- 3) 1968a では農家128軒として, そのうち単独家族の2軒を除いた126軒をベースにして, NF(nuclear family)型とSF(stem family)型を計算しているが, 本文中と図および表での数とは表面的には一致せず, またこれらの数値は1965aともあるいは1971aなどとも異なる。1965aと1968aとの食い違いは調査が長期にわたって行われたために, 集計が不完全であった面もあるが, これらの微妙な数字の食い違いはむしろマージナルなタイプの処理が集計上いかに調査者を困らせるかという事例の一つであろう。

れている。

「老夫婦と1組の若夫婦と孫の3世代にわたるstem family」は, その欠損形態を含めて, 38例ある[同所]。最初の娘が結婚して同居するSFa型と, 娘の夫婦家族が独立して次の娘たちが次々と同様に結婚して同居していくSFc型と, 最後の娘が結婚して未婚の娘がもういない老夫婦, 娘夫婦, 孫からなるSFb型との三つが社会的に意味ある区分とされる。

1965aと1968aとの論文において, 家族の周期的発展段階と農地所有規模とが密接な連関をもっていて, 村落の社会的階層はその両者(家族形態と農地所有規模)とによって測定できるということを水野は実証している。これは, 家族の社会的地位の高低の基礎は, 個人がなし遂げた家族再生産に対する貢献度[同上論文: 260]にあるとする村人の考え方とも一致するという。経済的な生産活動と, それに伴う社会的位置づけが, 家族における再生産と関連づけて考えられていることは興味深い。

II-3 1965aの論文で正戸と貼戸として捉えた親族集団を“multihousehold compound”と結びつけたのは1968bの論文においてであり, この和訳とみられる「屋敷地共住集団」の語は1969の論文に現われる。

Hanks 夫妻[1964: 201]は, タイ人における親族の集合体(kindred grouping)を三つのタイプに分けている。(1)一定の地域に隣接した二つ以上の家屋に住んでいる multihousehold compound, (2)各家・屋敷地は独立しているが, 全体として一つのグループをなしている hamlet cluster, (3)離れて住んでいるがお互いに限定されたつきあいをしている linked hamlet の3種類である。水野は, 東北タイ以外の地域にも見出される multihousehold compound が彼の調査村において, 屋

敷地共住集団の元来の構造と機能とをよりよく保っているとする [1968b: 842]。その理由は、生産基盤である土地に開拓の余裕がまだあるから（あるいは最近まであったから）である [Ibid.: 852; cf. 1971a: 255; 1973: 172-173; 1975a: 71; Potter 1976: 184; 坪内 1980: 180]。この compound は土地を所有している農家を中心とする集合体で、その農家と一緒にひとり以上の土地のない耕作者が働く、すなわち、この農家と耕作者との間の親族関係と共同耕作という生産関係によって結びつけられた二つ、またはそれ以上の家族、または世帯から構成される一種の農業協同組織 (a kind of agricultural cooperative organization) であると規定される [1968b: 845]。このような compound 19例中、2 家族 (family) から構成されるものは13例、3 家族は5例、4 家族 (four-family compound) は1例数えられている。ここで考えられている compound は必ずしも厳密な意味での1 屋敷地内のものではなく、(1)同一 compound に一緒に住む複数家族、(2)隣接する compound に隣り合って住むもの、(3)構成家族が村の中に散居している場合も含まれている [Loc. cit.]。果たしてこの最後の場合が compound といえるかどうか疑問であるが、とにかくその内部では「ともに働きともに食べる」(hed nam kan kin nam kan) [Ibid.: 846] という強い感情で結びつけられているという。ただし、その記述の直前で水野は compound 内の各家族は別々に寝、別々に食べるとしているので、もしこの共働共食が compound の内部で働く共同感情であるとする、それは生産と分配とを象徴的に表現しているとするべきであろう。

個々の multihousehold compound は一時的な親族集団 [Ibid.: 845]、特殊な家族形態 [Ibid.: 852] であり、1 世代を越えて存続しない。また個々の compound には名称もないし、multihousehold compound を総称するタ

イ語もない。⁴⁾

なお、1968a の論文で示された家族周期の図 (図2) の SFb と SFc は 1968b の論文以後は subscripts が入れかえて使用されている (図4 参照)。⁵⁾

II-4 村落内の親族の集合体として、家族、屋敷地共住集団、双系的親族の3種が明記されるのは1969の論文が最初であり、かつ屋敷地共住集団が術語として用いられたのも同論文に始まる。それまでの水野の論点は家族の周期的発展段階に力点が置かれていたが、それを発現させる原理ないしは制度としての「妻＝母方的要素の濃厚なる双系的親族組織」[1969: 695] が措定されている。水野が妻＝母方的色彩と呼んでいる特徴は、(1)妻方居住制ないしは婿入婚、(2)娘均分相続制、(3)末娘による親の扶養ならびにその家屋・屋敷地の相続、(4)母方親族への親密性、(5)崇りを及ぼす祖霊が母方の祖母ないしその兄弟姉妹に見出されること、すなわち、ピー・スアの母系系譜 [1971b: 223] である。

1969の論文における社会構造の概要によると、家族形態の「多くは」核家族であるとし、「しばしば娘の志向家族と生殖家族をつなぐステム・ファミリーの形態」をとることにしている。このステム・ファミリーは、世代を越えた連続体ではなく、親1代限りの存在であるということが再確認されている。ここでより明示的に「娘の」という形容詞を使っていることに注意したい。息子がステム・ファミリーの結節点である事例はあることはある

4) 英語の compound はマレー語の kampong から起源したもので、マレー語のそれは家の集まり、区画を意味するものと思われる。インドネシア語では物理的な屋敷地は pekarangan が使われるようである。

5) 各位相における世帯主の平均年齢が常に言及されているが、女性中心に各位相ごとの中心となる女性の平均年齢をとってみると面白いかもしれない。

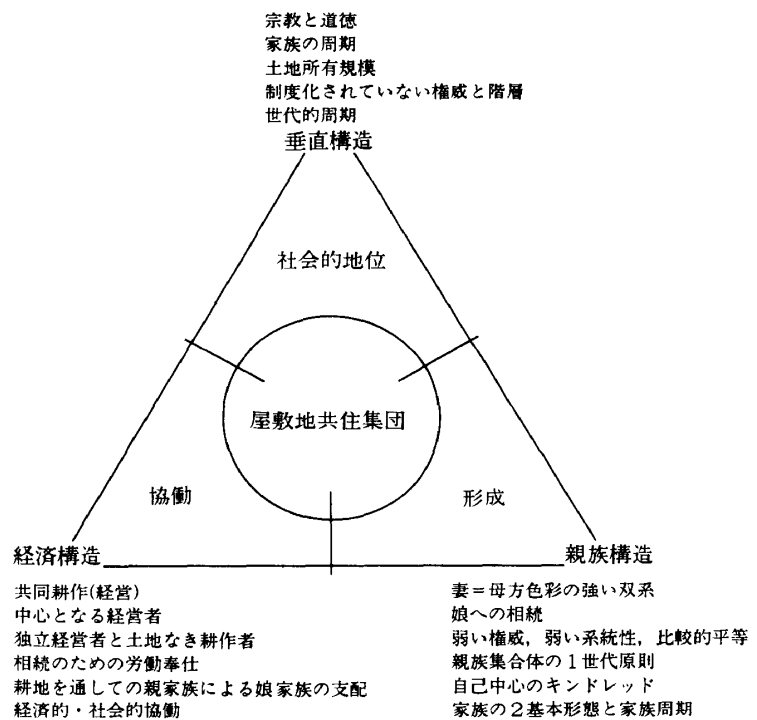
が [1965a: 26, 28], それを捨象して女系的要素を強調している。

屋敷地共住集団については, 家族の周期の第3段階に現われる共同耕作の経営者とその娘夫婦の家族による親族労働者とかから形成されとしている [1969: 696]。また, 双系的親族 (1971b の論文ではキンドレッド) の範囲を「第2従兄弟姉妹までの血族とその家族を含む」 [同上論文: 697] と定義している。この親族が機能するのは, 得度式, 冠婚葬祭, 喜捨行事における相互扶助, 田植え, 稲刈りの労働力の提供においてである。個人を中心とする双系的親族の重なり合いから, 村内のほとんどすべての農家が親族関係を通じて相互に関連づけられていることは言及されているが, より明示的には 1975a の論文に展開される。

II-5 1971年にまとめられたドーン・デーングの英文モノグラフでは, 屋敷地共住集団について基本的に 1968b の論文が踏襲されているが, さらに1歩進めて, 調査村を屋敷地型社会構造 (compounds-type of social structure) [1971a: 245, 256] と特色づけている。それを図式的に示したものが図3である。この図からは, 諸要因がいかに屋敷地共住集団の形成過程に関連しているかを示してはいるが, 村落社会がこの三つの位相のみによって, すなわち, 屋敷地共住集団によって構造的に説明されうるか否かということについては説得力を欠いている。図4は, その動態的モデルと名づけられ, 家族周期に社会階層上の地位 (上, 中, 下) と, 農家経営における地位 (農地なき耕作者, 独立農家, 共同耕作の経営主) (用語は [1971b: 223]) とが相関させられている。いうまでも

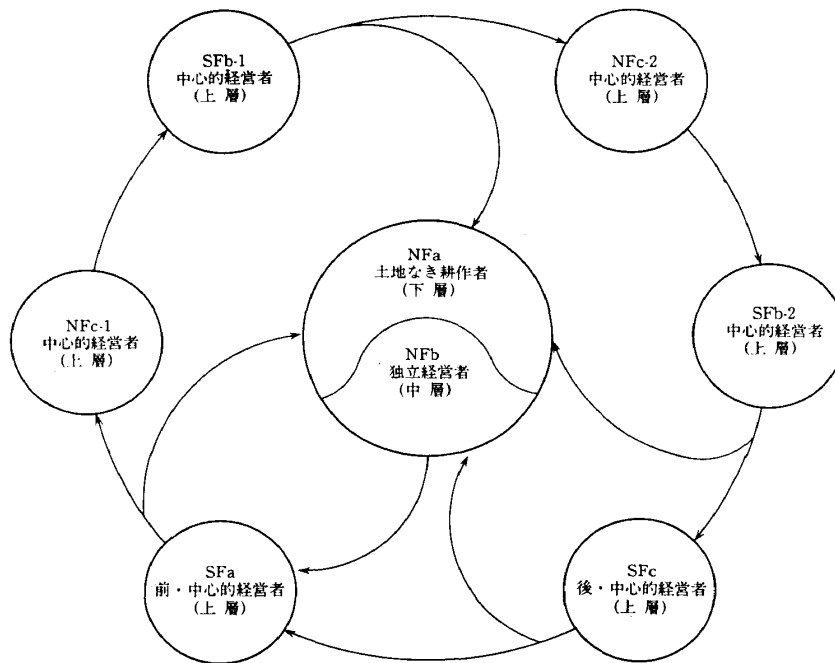
なく, NFa である土地なき耕作者は NFc-1, SFb-1, NFc-2, SFb-2 の経営主のいずれかの耕作者であり, この一連の世帯群が図2で示された点線より上の部分に相当し, 屋敷地共住集団と呼ばれるものである。

II-6 日本人研究者による現地調査を基礎にして, 東南アジアの村落社会の特徴を抽出する作業の中で, 水野は「農村部で集団らしいものとしては家族と村があるのみ」 [1973: 163; 1975a: 72] であるとし, 家族の範囲を越えては屋敷地共住結合や個人を中心として広がる双系親族があるのみであると指摘する [1973: 164]。家族を越える親族のつながりのあり方は, (1)婚姻の形態, (2)結婚後の居住の場所についての習慣, (3)扶養義務や相続の慣行, (4)土地所有の形態によって左右されるという [同所]。水野の調査では, 水田所有を媒介として, 妻の両親と娘夫婦の家族とが結びついた「屋敷地共住結合」となって現われてくる。その形成・発展・消滅は「双系的親族組織の



出典: 水野 [1971a: 288]。

図3 ドーン・デーング村の構造モデル



出典：水野 [1971a: 288]。

図4 動的モデル

もとに現われる家族の周期的発展」としてみられ、村内の家はどの家をとっても屋敷地共住結合の段階を経過するという。⁶⁾ ある1時点をとれば、全農家の2/5は「屋敷地共住結合」に関係なしに独立して存在し、2/5は屋敷地共住結合をなし、1/5は屋敷地共住結合の直前ないし直後の形態を示しているが、個々の家族の一生をとれば、この周期の諸位相を次々に経験していくことになる。すでに述べたように、家族周期と社会的階層とは密接な相関を示すので、その周期の重要な位相である屋敷地共住結合は東北タイの村の全構造を理解する上で中心的概念と考えられ、「屋敷地共住結合型」の社会構造と名づけられる理由もそこにある[同上論文: 169-173]。

水野はもちろんこの屋敷地共住結合をタイ

村落あるいは東南アジア村落の特徴とするのではなく、「村落の発展段階のある時代」にみられる現象、ないしは土地と人口とのバランスが都合のよい条件のもとでのみ現われる現象かもしれないと考えている。坪内が指摘するように、農地の零細化、未開拓地がない状態、人口増加、職業の多様化の条件のもとでは「屋敷地共住結合」がそもそも成立しないのではないかという疑問[坪内 1980: 180]とともに、もし未開拓地が豊富であれば、「屋敷地共住結合」という過程を経ずに直ちに独立農家へ移行しないのは何故かという疑問も起る。もしこれが独立農家への準備期にすぎないとすれば、必ずしも屋敷地共住結合を社会構造説明の中心に置かなくともよいかもしれない。

なお、1973の論文で屋敷地共住集団ではなくて「結合」が使われているのは注目に値する。1975bと1976の論文においては、再び「集団」としているが、「集団というより結合といったほうがよいかもしれない」[1975a:

6) 屋敷地共住結合前の世帯が将来本当にそのような結合に移行するかどうかということは別にしても、屋敷地共住結合後の世帯の家族歴が事例的に示されていないのは残念である。規範として屋敷地共住結合を通過する家族周期の観念がタイ農民にあるという記述は水野にはみられない。

82]と注記している。ただし、屋敷地共住については、1969の論文以来一貫して変わることなく使われている。

II-7 水野は、タイ語のクローブ・クルア (khrop khrua) を家族として、(1)家屋をともにし、(2)共通の竈をもち、(3)日常生活をともにする、(4)親族の集まり [1973: 163] としたり、(1)一つの家屋に住み、(2)竈を共有し、(3)寝食をともにし、(4)独自の家計を維持する、(5)近親の集団 [1975a: 64] としたり、あるいは簡単に、生産と消費、および日常生活をともにする最小の単位 [同所]、通常世帯として現われ、住居と家計をともにする生活集団 [1975b: 36; 1976: 92]、夫婦と子供を中心とする日常生活の共同にささえられた集団 [1974: 219] などの表現をもって表わしている。そして社会集団としての家族はさまざまな形態をとって現われ、核家族であったり、ステム・ファミリーであったりする。さらに、屋敷地共住集団も家族の1特殊形態とみられるし、時折り集まる集団 (自己と配偶者の両親の親族核、自分の親族核、娘・息子たちの親族核) としても発現する [1975b: 41; 1976: 95-96]。ここで水野が言外に指摘しているのは、家族と世帯の区別がタイ語 (ないしはタイ社会) ではなしえないことと、家族の境界のあいまいさとの2点と考えられる。

このようなタイ家族の捉え難さを解決し、日本的な家族と比較するために、水野は家族を社会集団としてではなく、文化的様式として捉えることを試みる。村人の考え方からすると、家族とは夫婦と子供の集まり [1974: 219; 1975b: 40; 1976: 95] ではあるが、その論理的様式は、家族という固定した集団があるのではなく、個人ないしは夫婦を中心とした「放射的拡大」である [1975a: 75; 1976: 95-96]。それは個人を超越した集団ではなく、現に生存する夫婦、親子、兄弟姉妹などの二

人関係の累積体 [1976: 96] として認識されている。タイの家族は、(1)個人によって家族の範囲がずれるという意味で、無定形で、非永続的で、1代限りであり、⁷⁾(2)家族内部では比較的平等主義的で、役割規範は明確さを欠いて、「内部の構造」も弱く、(3)個人の集団からの相対的独立性を特徴としている [1975b: 43; 1976: 96]。このような家族を家族として秩序づけている一般的原理は、(1)成員の直観的連帯性および相互の情緒的関係を価値あるものとする態度が支配する「間柄の論理」⁸⁾と(2)仏教的心像が生み出す価値観であるとする [1975a: 75; 1975b: 44-47; 1976: 97]。

このような構造原理は家族だけでなく、村のレベルにまでおよんでいるようである。屋敷地共住集団を、この観点からみれば、その構成単位は世帯家族ではあるが、構造としては、親子・兄弟姉妹のタイ的關係を基軸としていて、ここでも間柄の論理が支配する [1976: 104]。ヤート・ピー・ノング (yat phi nong) と呼ばれる双系親族あるいはキンドレッドも個人を中心に構成される [1975a: 66]。血縁者のほかに、その配偶者も含まれているというのであるから、上述の「時折り集まる集団」を中心とする広がりともてよさそうである。村のレベルでは、「村とは妻=母方的要素の濃厚な双系親族の連鎖的累積体」[同上論文: 70]であり、「親戚・縁故を基体とする二人関係が生み出す情緒的な紐帯と連帯感の集合体」[同上論文: 75]であると明瞭に述べられている。そして、親族名称が非親族に対しても擬制的に適用されるので、村は一種の親族共同体とみなされる。

7) 同じ個人でも、時と状況に応じて家族の範囲が伸縮することは、明示的に記述されていないが、上述の家族の定義、社会集団としての家族現象からみて明らかであろう。

8) 日本語では、間柄という語は、互いの関係、つきあい、交際などという意味と同時に親族、血族などの続き合いの意味もある。

II-8 水野は上述のようなタイ人の諸組織体に共通する一般的な組織のあり方を「親元組織」と名づけてはどうかと提案している[同上論文: 82]。水野自身は親元組織を家族の分析に使ってはいないが、これは取り巻き連としての世帯 (household as entourage)⁹⁾ あるいは家族的取り巻き連 (family entourage) [Potter 1976: 196] という、家族あるいは親族の集団をも一つの entourage としてみようとする見方につながる。いいかえれば、個人個人は二人関係の網の目の中心に常に位置しているのであるが、それが客観的に目にみえうる集団となって組織化されているのは、中核になるような有力者の存在があって、その周りに他より強い紐帯で結ばれる時である。屋敷地共住結合はとくに entourage 的要素が強いといえる。その結合で中核になる有力者は、与えるに十分な農地をもっている世帯主、経営主であり、取り巻き連はまだ成人していない家族員、結婚してはいるが家のない同居同世帯の娘夫婦、別世帯で別の家をもっているが同じ屋敷地に住んでいる娘夫婦家族である。屋敷地も独立して、家屋、穀倉、農地ともに自分のものがそろっている娘夫婦家族は、独立農家として水野のいう屋敷地共住結合からは排除される。排除されているものには、その他に、他出していった息子夫婦家族、世帯主の独立した兄弟姉妹の家族があることも確認しておきたい。排除された部分をも考慮に入れると、屋敷地共住結合において中核者と取り巻き連を結びつけるのは、共同耕作農地と相続権であり、親族核の放射的拡大である家族ないし親族関係そのものではないことが明確になろう。この意味で、屋敷地共住結合を家族と双系親族との中間的形態とみることに對する疑念も出てくる。

9) Hanks は、夫婦関係には patron-client 関係が適用できないとしながら [Hanks 1975: 200], 家族、親族も entourage 型の組織であるとする [Hanks 1972: 86]。

かく整理すると、屋敷地共住結合を家族・親族集団として捉えようとする、二様に解釈されうる。第1は、屋敷地共住結合はむしろステム・ファミリーの1変形にすぎず、たまたま屋敷地に余裕があるので本来親の世帯に含まれるべき娘夫婦家族が一時的に両親の屋敷地に家屋を建てて別居していると考えられる解釈である。第2の解釈は、屋敷地が同じであってもなくても、タイの夫婦は独立世帯を営むのが規範であって、ステム・ファミリーにおいて世帯共同で娘夫婦が親と同居するのは、婚後の居住慣行の期間が少し長くなっただけ、すなわち、分出初期の必然的な現象にすぎず、同一屋敷内に家を建てるのは、他に屋敷地が手に入らないからだとする考え方である。ここで強調しておきたいのは、タイの家族形態がステム・ファミリー型であるか、核家族型であるかというような不毛な議論 (たとえば, Smith [1973]) ではなく、屋敷地共住結合を単に家族・親族という面からみれば、どちらにでも解釈しうるということである。

水野が屋敷地共住結合を、彼のいう世帯家族 (核家族とステム・ファミリー) とは区別した概念として取り扱ったのは、恐らくタイ語の家族・世帯を示すクローブ・クルアを尊重したからであろうが、ともかくドーン・デーング村の構造を解明するのに重要な役割を果たしたことは否めない。しかし、比較的後期になって、タイ社会全般あるいは日本社会との比較を考察の対象とする諸論文においては、屋敷地共住結合が、彼のいう社会構造の型として抽出しうるのかどうかという疑問を抱かせるような記述が散見される。この食い違いあるいは転換は、家族を社会集団として捉えるか、あるいは文化様式として家族概念を追求していくかというアプローチの差に起因するように思われる。

III タイにおけるその他の研究¹⁰⁾

III-1 水野の調査したドーン・デングの村人たちの故郷の一つであるマハーサーラカム (Mahāsarakham) の近くの Bān Nōng-tūen を調査した Keyes [1975] は、親族集団を(1)育児と経済的依存とを契機として結びつけていて、姻族を含む “domestic group,” (2)一定の祖霊 (phīpūtā) を共通にする非単系出自集団, (3)自己を中心とした非単系出自集団とに区分する。水野は系譜性を否定しているから出自集団などということばは使わないが、Keyes の非単系出自集団は水野の妻=母方的要素の濃厚な双系親族ないしはキンドレッドと時折り集まる集団にあたると考えられる。Keyes は出自集団は姻族を含まない [Ibid.: 275] といいながら、実際には姻族が含まれている [Ibid.: 295] としている。この集団形成は、出自原則によるのではなく、婚後の妻方居住制が一見母系制的な特徴を与えているのであり、親族集団を構成している基本単位が個人ではなくて夫婦中心 [Ibid.: 287, 295] であると主張する。このような性格の親族集団をわざわざ出自集団と呼ぶ必要があるのかは理解に苦しむところである。

domestic group にあたる Thai-Lao 語は langkhāhūēan (lit., ‘roofhouse’) [Ibid.: 281n] である。このことばそのものは独立家屋に住む世帯を指すようにみえるが、実際には、経済的に親の世帯に依存している世帯は親の世帯の一部とみなされるとしている。Keyes の調査村では、domestic group は83の独立世帯と16の妻の両親と一緒に住む大家族 (uxori-parental extended family) とからなる。後者は36の世帯によって構成される。この大家族は、親の世帯が核家族である場合 10 例

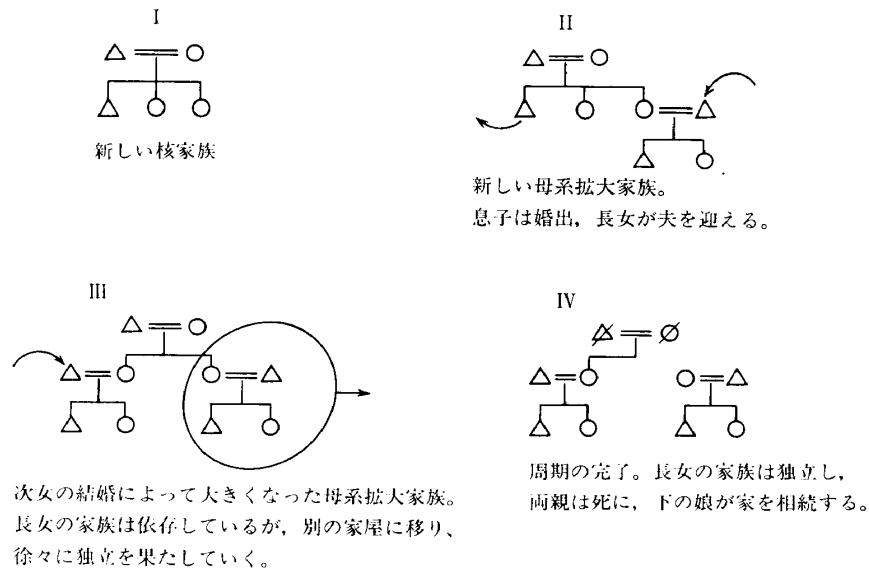
(22世帯)と、親の世帯の中に娘夫婦が含まれるステム・ファミリー (uxori-parental stem family) である場合 6 例 (14世帯) からなり、拡大家族として結びつけているのは親の土地所有とその使用権であって、もし土地が domestic group を養う上に不十分であると、これら拡大家族の構成単位は早期に分裂していくとしている [Ibid.: 287]。Keyes は一見新しい術語を造って使用しているが、屋敷地共住結合を類型的に分けたものにすぎず、むしろ水野の家族周期と結びつけた屋敷地共住結合の発現の仕方の説明の方がより洗練されているといえる。ただ、これら親族集団形成の構造的原理を婚後の居住規則と結婚紐帯とに求めた視点は評価できる。¹¹⁾ そして、拡大家族タイプの domestic group を Bān Nōngtūen においてもっとも重要な親族集団とみなすパースペクティブ [Ibid.: 297] は、水野のそれと一致するものである。

なお、東北タイの Tambiah の報告 [1970] は、家族・親族について短くふれて、妻方居住制と、娘による居住権の相続による、姉妹、母方平行イトコの屋敷地共住は、母系を強調しているが、基本的には双系的、自己中心的であるとしながら、pioneer settlement [Ibid.: 12] としての性格を指摘することも忘れていない。

III-2 北部タイに関しては、母系出自集団を指摘した Turton [1972] と母中心制を指摘した Davis [1973] があるが、ともに祖霊崇拜に結びついた儀礼的母系制であることに関しては一致している。さらに Davis は、北タイの母系制 (matriliny) は男移動制 (male mobility) と密接に結びついたものである [Ibid.: 60] としている。彼の調査村では、婚後初期の妻方居住制が義務として明確にあるが、43

10) タイ研究における屋敷地共住集団のサーベイについては、J. Potter [1976: 151-158] および S.H. Potter [1977: 5-19] を参照。

11) 離婚、離別の際の財の処理、息子の財産権、養子慣行など水野を補う記述も注目される。



出典：Potter [1976: 122]。

図5 家族および世帯周期の位相

世帯のうち、29世帯が核家族、12世帯がステム・ファミリー、2世帯が夫の両親の屋敷地共住集団をなしている。

J. Potter [1976] は、基本的には loosely-structured system のパラダイムを打ち壊すための議論を展開しているのであるが、タイ社会においては、家族関係、居住規則、相続パターンは明白に規定されており、母方親族集団とともに団体的拡大＝直系・母方居住家族 (corporate extended-stem matrilineal family) が存在しているという [Ibid.: 147]。Potter は、Keyes 同様、pii nong kan と呼ばれる「母方および父方の祖父母の子孫」からなる双系的キンドレッド [Ibid.: 136] と、3～8世代前の姉妹を共通の祖とする女の系譜をたどる母系リニッジの存在を指摘している。後者は共通の祖霊を崇拝するグループで、比較的かたまって同じ区画に住む傾向がある。しかし、共同の財産はない [Ibid.: 141, 144]。家族については水野と同じような周期を考えている (図5)。¹²⁾ 第Ⅲ位相が屋敷地共住結合にあたる。親の世帯への依存度は、親の水田を耕作し、親の穀倉から食物をえ、親の世帯の権威

に全く従属する段階から、食糧生産においては独立し、自分たちの穀倉をもち、自分たちの耕地を経営しているが土地の正式な所有権のみがまだ両親の手元にある段階まで、いろいろあるが、いずれにしても実際には母系拡大家族のメンバーである [Ibid.: 123-124]。Potter はこの母方居住・拡大・直系家族とそれにまつわる周期が、北タイに限らず、タイの基本的なパターンであると一般化する [Ibid.: 151]。これは統計的な処理による推論ではなく、タイ人自身が家族とはこうあるべきだと信じている規範なのであるともいう [Ibid.: 152]。

S. H. Potter [1977] は、このようなタイの家族を女性中心制 (female-centered system) と称する。母から娘へという女性の関係が社会構造を決定し、男性の間の関係をも規定す

12) Potter は家族周期と社会階層との間の相関を十分把握していないようにみえる。水野が土地は無制限にあるような印象を与える記述をしていることを Potter が指摘しているのは正しいが、水野が家族周期と社会階層とを混同していると批判する [1976: 184] のは的を射ていないといえよう。

る。しかし、権威は男性にあり、それは妻の父から娘の夫へと受けつがれている。この点で、カリブ海沿岸やジャワで報告されているような、女性が優位にたち、心理的に主導的な役割を果たす母中心制 (matrifocality) とは区別され [*Ibid.*: 19-21], むしろ父系制の対概念をなすと考えている。S. H. Potter は、水野のデータを彼女の枠組の中で分析もしてみせていて [*Ibid.*: 15], その姻族間の権威継承ラインの指摘は重要である。しかし、女性の構造的な重要性と彼女がするのは、むしろ女非移動制 (gynecostatism) [メイヤスー 1977: 47] によるもので、系譜性と断定するにはデータの不一致が目立つ。たとえば、母系リニッジの祖霊のうち、男の霊は姻族であり、女の霊は血族であるとしたり [1977: 115], あるいは村の母系リニッジの系譜の中に母系メンバーとは考えられない成員が含まれている [J. Potter 1976: 142]。水野の「妻=母方的要素」の扱い方には不十分さが認められるとしても、これを母系リニッジ、母系クラン、出自集団とするのは行きすぎのような気がする。

Ⅲ-3 中部タイで Hanks [1972: 81] は、khraūb khrua を家族とはせず、世帯と訳している。その理由は「家族」の訳語を使うと“a limited and fairly stable group of people”を示唆するからであるという。

バング・チャンが焼畑耕作に依存していた時期の世帯の特徴は次の通りである。世帯を構成する第1原則はすべてのメンバーが自由意志によって参加すること、すなわち、加入脱退の自由が親子の間にさえも象徴的に存在していること [*Ibid.*: 83]。そしてそのメンバーは、ある中心人物を極とした対関係 (paired liaison) をなし、その対となるふたりの間ではお互いに平等ではなく、一方が他方よりより権威をもっていると考えられ、それにもかかわらず、どちらかでもその互酬関係を止め

てしまうことができる [*Ibid.*: 82-86]。世帯群 (a cluster of households) も基本的にこの恩恵を与える者に権威が付与され、一方的に関係を破棄してしまえるような対関係にある人々の間の、自由意志による互酬性に基づいており、どちらかといえば自給自足的な隣人にすぎない [*Ibid.*: 89]。対関係によってできる圏の大きさは、中心人物が左右できる財によって決まる。大きければ大きいほど、対関係の数は多くなり、その結びつきは強くなる。

その後のバング・チャンにおける農業技術の展開、土地不足、人口増加などの変化にもかかわらず、Hanks が kinship community と呼ぶ家族生活の位相は現在でも変わらないようである。というよりは、現在の家族・世帯的特徴でもって過去の開拓期におけるそれを類推したのであるから当然ともいえる。総じてバング・チャンにおいては水野のいう間柄の論理が生活全体を覆っているといえる。あるいは、屋敷地共住結合を集合として認識するか、“voluntary paired liaison” とみるかという認識の差が、北・東部タイと中部タイとの報告における家族の見方の差異にそのまま表現されているのかもしれない。

Ⅳ マレー農村との比較

Ⅳ-1 マレー農村にも、水野が東北タイで指摘する屋敷地共住結合は現われる (ケダーの屋敷地世帯群については口羽他 [1976: 62, 72, 83-85]; クラントンにおける親子きょうだいの近隣居住あるいは親族近隣居住については坪内 [1972: 1974]; マラカの compound cluster については Kuchiba *et al.* [1979: 273-275])。13) しかしながら、マレー社会にはタイ国北部や東部の末娘の家・屋敷相続、より規範的な妻方居住ないしは女非移動制、そ

13) Kuchiba *et al.* [1979] は、基本的には口羽他 [1976] の翻訳であるが、一部削除、訂正された部分がある。英文の第15章の Social Networks は新たに加えられたものである。

れに伴う妻＝母方的要素の強い親族集団の形成がなく、女性のラインがよりあいまいである。¹⁴⁾むしろ中部タイの世帯の方がよりマレー的家族に近似しているといえる。

IV-2 東北タイとマレー農村の事例の異同を明らかにするために、水野の東北タイの資料と比較しながら、口羽が調査したケダーにおける事例を検討してみよう。

ケダーのパダンラン村 (Padang Lalang, 以下 PL 村と略す) にも、水野のいう「屋敷地共住結合」に類するものは少なくない。村内のマレー人の総世帯数は 180 であるが、このうち、1 世帯が 1 屋敷地に居住している屋敷地は、わずか 53 (全世帯の 29.4%) にすぎない [口羽他 1976: 62]。残りの 127 世帯は 2～7 世帯にわたって 48 の屋敷地に共住している。しかし、この 1 屋敷地内の複数世帯の集合体は、水野のいう正戸・貼戸の概念では、とうてい律することができないほど複雑である。この違いは、PL 村と水野の調査村との社会・経済的、文化的条件の相違による。

東北タイと異なる PL 村の主な特徴は、次のごときものである。(1) PL 村はほぼ開拓され尽くしたケダー平野の中央部に位置している。(2)両者ともに双系制が親族の構成原理であるが、PL 村には、「妻＝母方的要素」は全く存在しない。末娘相続の慣行はなく、イスラム教の影響による男女不均分の相続法と土着の両性均分相続法がある。どちらかといえば、総じて両性均分の考え方が根強い。(3) 子供は結婚後は、原則として経済的事情が許せば、親から独立した屋敷・住居をもつ。経済的に不如意の場合には、子供夫婦は夫または妻方の実家を頼って生活する。しかし、その場合も、独立した家屋に住むのが常態であ

る。(4)親が経済的に困窮する場合には、子供の誰かが親を扶養するが、その場合にも、親は独立の家屋に住む例が多い。(5)生産・消費・住居の共同は通常世帯単位に行われ、親・子の夫々の世帯には、さまざまな相互扶助がなされるが、東北タイのように近親による共同耕作、生産・消費の共同はみられない。親が自作農、子は親に依存する従属農業労働者としての正戸・貼戸の関係は、存在しないとはいえないが、かかる自作農、従属農業労働者の関係は親・子の世帯間にのみ限定されず、近親間、特に親しい者の間に広くみられる関係である。実の親子間の地主・小作関係も、PL 村では珍しいことではない [同上書: 92]。しかし、この関係がマレー農村では生産と消費の共同体へと展開しない。

IV-3 家族の性質も東北タイの水野の調査村と PL 村のマレー人の家族とは、かなり異なるように思われる。「妻＝母方的要素」を伴うタイ人の家族では、マレー人の場合より集团的閉鎖性と継承性が多少強いように思われる。Keyes が近親の集団を domestic group として捉えるのも、そうした家族の性質への着眼によるのかもしれない。

マレー人の家族の場合には、そのような集団性が目立って弱い。この弱さはあくまでも相対的なものであるが、個人は生まれながらにして、父方にも母方にも同等の関係をもつという意味において、そこには排他的所属の意識はない [同上書: 64]。また、子供は結婚後も、自己の実家、すなわち、養育家族の 1 成員であり続ける。婚出したのちにも、実の親の財産の相続権をもち、配偶者と離別した場合には、容易に養育家族に帰ることが可能である。いいかえれば、子供は結婚後も、たとえ住居や世帯を異にしても、養育家族と生殖家族の両方の所属を失うことはないといえる。

14) ただし、ヌグリ・スンビラン州のミナンカバウ人の子孫の社会組織は母系制原理によって構成されており、北タイよりより明確な母系制の特徴を示す。

マレー人の家族にみられる，このような集団の排他性の欠如は，中国や西洋と日本の伝統的な家族と質的に異なる点である。一系的親族においては，構成員の所属が一系的に定まるため，親族の集団性は強まるが，双系制親族の場合には，極端に言えば，親族関係があるにすぎない[馬淵 1971: 30]。しかし，同じく双系制親族組織のみられる場合でも，家族内の特定の関係，たとえば，夫婦関係や親子関係が制度的に優性をもつ場合は，それらの関係に優劣の差をつけることによって，家族の集団性を保持することは可能である。たとえば，西洋の夫婦家族の場合，夫婦関係の優性のために，一つの家族には一つの夫婦しか存在しえないし，子供は結婚すれば，本人がその中で成長した養育家族と，本人が配偶者とともに形成する生殖家族とは，構造上，相互に分離される[Sakuta 1978: 9-10]。日本における「家」の観念は，日本の家族の強固な排他的枠の基盤を構成する。

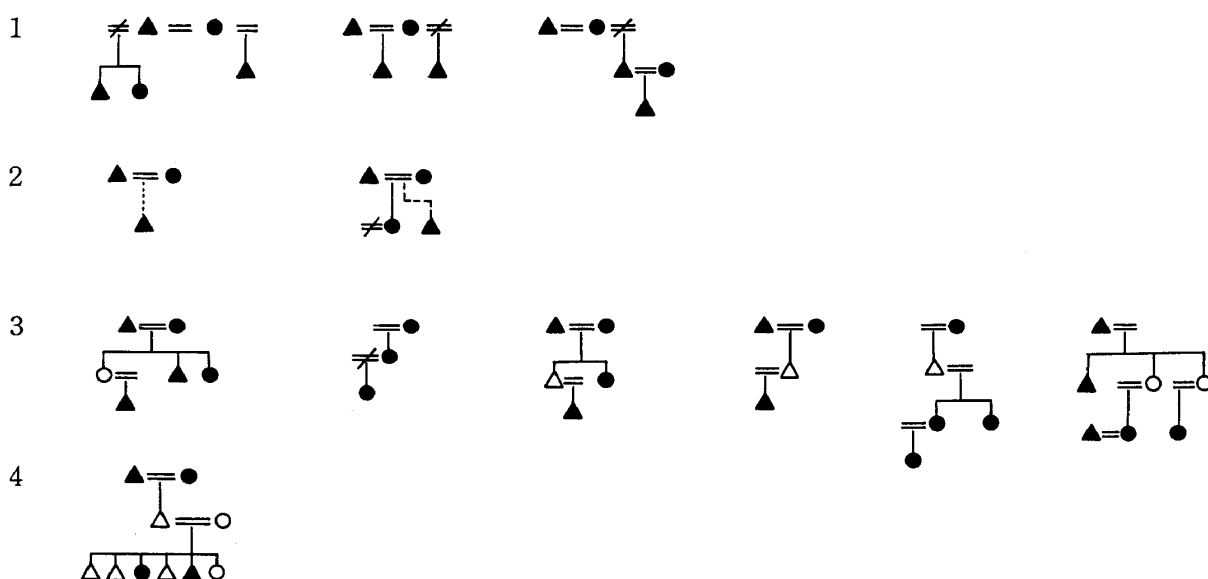
マレー人の家族も，通常婚出した子供が独立した世帯を構成するという点において，西洋の場合と似ているように見える。しかし，夫婦，親子，きょうだいのどの関係も，特に目立った優性をもつように考えられない。とすれば，家族は集団というよりも，夫婦，親子，きょうだいの関係の累積態である。かかる家族は輪郭のはっきりした集団として理解することが困難になる。坪内・前田がマレー人の家族を集団としてでなく，「二者関係の累積態」としての家族圏という概念で捉えることを主張した[坪内・前田 1977]のも，以上の観点による。この概念はマレー人の家族のみならず，他の文化・社会においても，家族とキンドレッドの関係を考える場合には，有効なものと考えられるが，マレー人家族の場合には，社会的カテゴリーとしての家族概念を用いなければ，実態が把握しにくい。

たとえば，PL村の180世帯を家族構成の形

態別にみれば，それは実に多様である。欠損形態や養取，再婚による連れ子などの事例を含めた核家族は117あり，その他の親子2世代世帯は2，3世代世帯は34，4世代世帯は1，祖父母と孫からなる世帯は9，老齢夫婦世帯は7，単身者世帯は6，傍系親族によって構成される世帯は1である。核家族の形態が圧倒的に多く，総世帯180の65%を占める。

水野にならって，ごく単純化すれば，世帯の家族的構成は養育家族から分出した新生期の核家族，成熟期の核家族，すべての子供が分出したあとの老齢夫婦の家族，老齢者単身世帯に分けられる。これらの家族形態が複雑に多様化するのには，それぞれの段階において上述の集団的排他性を欠如したマレー人家族の性質に関連して，(1)離婚・再婚に伴う連れ子，(2)養取，また(3)子や孫の離婚・再婚や経済的理由による子・孫の引き取り，(4)親の老齢化による孫の引き取りや養取，(5)親の老齢化による親の引き取りなどが少なくないからである(図6参照)。

しかし，このような親と子・孫との間の相互扶助の関係は，生産と消費を共同にする世帯の中に限られないで，世帯と世帯の間にまで広がる。生計の単位として，親と子・孫の世帯が独立していても，このような近親は，経済的相互扶助がまず期待される間柄にあり，彼らの間では家族としての強い親近感と連帯感が見出される。PL村における屋敷地の世帯群の核となるのは，このような近親の複数世帯の家族結合で，複世帯家族ともいうべきものである。これらの集合体を家族として捉えるならば，180世帯の形態的内訳は核家族世帯数は117から53となり，その他の親子2世代世帯は1，3世代世帯は21，4世代世帯は1，祖父母と孫からなる世帯は2，老齢夫婦世帯は4，単身世帯は2，傍系親族によって構成される世帯は1となる。残りの95世帯は36の複世帯家族の中に組み入れられる。



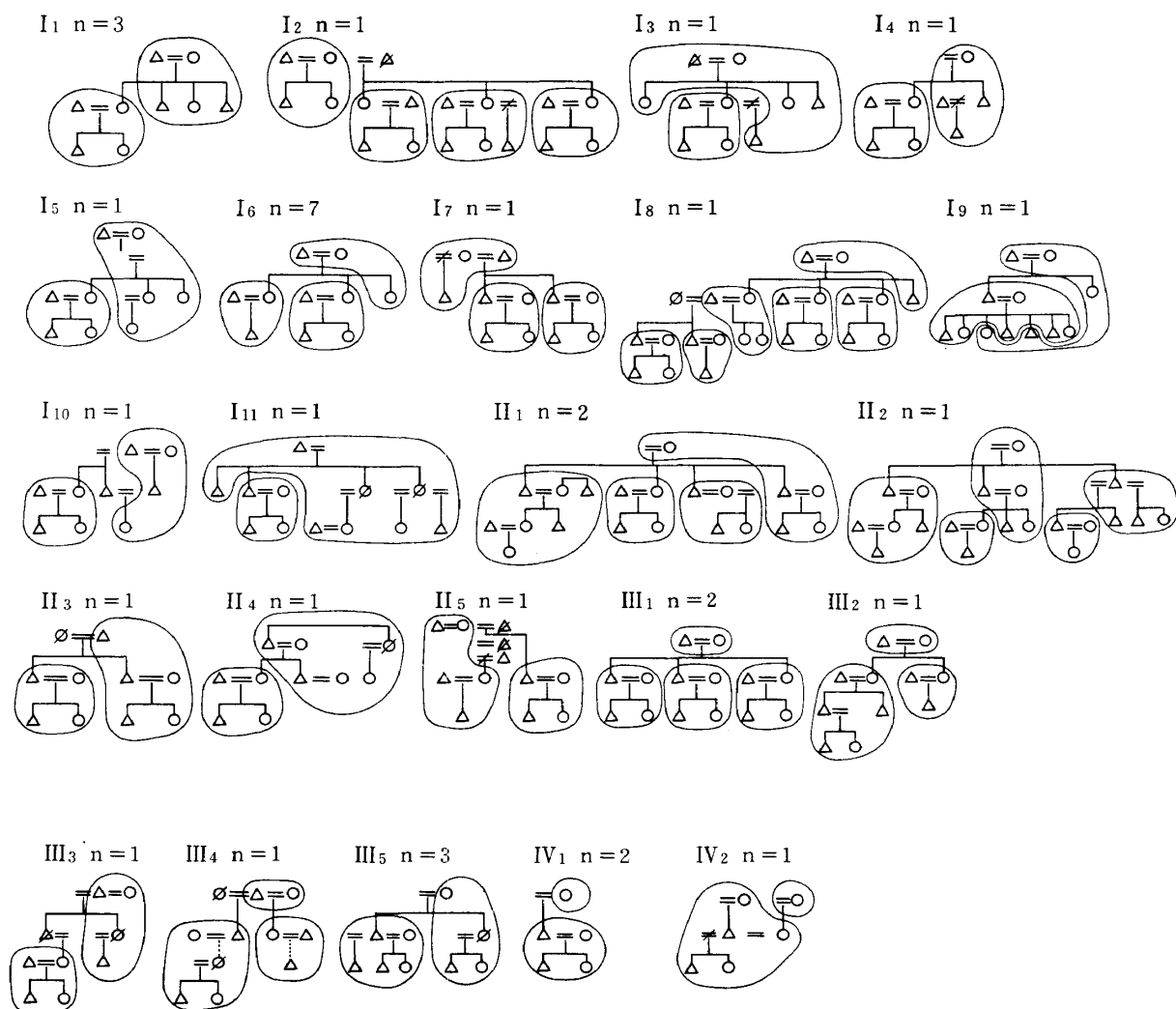
= 結婚, ≠ 離婚, 養子, △○不在成員

図6 世帯の家族構成——その変形——

この複世帯家族は基本的には、水野のいう正戸と貼戸の関係からなる。正戸から貼戸が分出し、正戸に貼戸が依存する場合に形成される集合体であるが、規範として形成されるものではない。規範として望まれるのは貼戸が異居独立することであるから、経済的事情が許せば、個々の世帯は分離独立する。ただ、世帯の家族構成の多様化について述べたことが、この場合にもいえる。したがって、この集合体も、図6のように、その構成内容はかなり多様なものとなる。その上、この集合体の正戸と貼戸の関係はIV-2において述べたごとく、共同耕作者の関係ではない。またすべての正戸が農地の所有者や屋敷地の所有者でもない。36の複世帯家族のうち、正戸がきょうだいと屋敷地を所有しているのは23例、7例は正戸がきょうだいと屋敷地を共有し、5例は親族や知人の屋敷地を無料で借用 (tumpang) し、1例は有料借用している。また、総じて複世帯家族は同一屋敷地内にあるが、貼戸が隣接する屋敷地に居住している場合(7例)もある。東北タイのように、PL村では

家族周期が土地所有と家族の経済的地位とに関連して考えられないのは、後述するようにPL村での均分相続制と土地に開拓の余地のない立地条件による。

このような複世帯家族の外延は明確に捉えることは困難である。親・子・孫・曾孫にわたる血縁者と、その配偶者を含む範囲内において、状況に応じて構成員が変化するためである。その範囲内において、正戸を中心に各構成世帯の独立性が保持されながら、相互扶助を必要とする近親の世帯が状況に応じて、構成単位となる。家屋を建てる用地の無料借用、その他の経済的助力(農地の小作、労働の提供)などは、まず家族内において求められる。図7のII₁とII₄が示すように、相互扶助の範囲は状況によって、傍系親族にまで拡大される。また、援助の提供者は正戸とは限らず、親の老齢化の場合には、小作である子供が高い小作料を地主の親に支払うことによって、親を助力する場合もあり、家族周期に関連して援助を与える者と受ける者は変化する。このような互助の関係はまず家族圏の内



n = 3 事例数, Δ=○ 婚姻関係, ∅ 死亡, ≠ 離婚, 養子, ○ 同一家屋に居住する世帯

図7 複世帯家族の構成

部で行われ, 同一家族圏の成員は, 相互の家に比較的自由に出入りする。

さらにマレー人の家族においては, すでに述べたように, 個人は養育家族と生殖家族の両方に所属しうするため, 家族を単位としてみれば, 夫方と妻方の双方の家族は, 図8のように, xにおいて重複する。

IV-4 東北タイの「屋敷地共住結合」は養育家族としての正戸と生殖家族としての貼戸の結合を主軸としたものであるが, PL村の場合には, 前節で述べた複世帯家族は, 屋敷地

世帯群の全体を特徴的に示すものではない。

屋敷地世帯群48のうち, 屋敷地に正戸・貼戸の複世帯家族が共住する前は約半数足らずの22例であり, 全く親族関係のない世帯の共住例は5, 残りの21例は近い親族の共住によるものである。

これらの共住親族の構成は, 均分相続制と土地の開拓の余地がないために, 他人の共住例5を除いて, 典型的に示せば, 図9のようになり, CG1からCG4へと展開している[口羽他 1976: 83-85]。CG1は東北タイの屋敷地共住結合に近いが, CG1の親が死亡

すれば、それはCG2のきょうだいの世帯を中心としたものに移行する。CG1の22例の正戸の平均農地所有面積は8.3 relong (2.36 ha)であり、構成世帯の数は平均2.5であるが、CG2では、屋敷地はきょうだいの共有名義となり、きょうだいの所有農地は平均3.5 relong (0.99 ha)に減少し、共住世帯平均は2.8となる。この世帯群では、きょうだい、おじ・おば、おい・めい、いとこの関係が中心となる。

きょうだい夫婦が死亡したり、他出したりすると、CG3の型に移行する。しばしば、屋敷地は、CG2の段階のきょうだい共有名義のままで分割されず、共住世帯の関係は、おじ・おば、おい・めい、いとこ、ふたいとこの関係が中心となる。CG3の主要な所有農地面積は算出しがたいが、平均の世帯数は

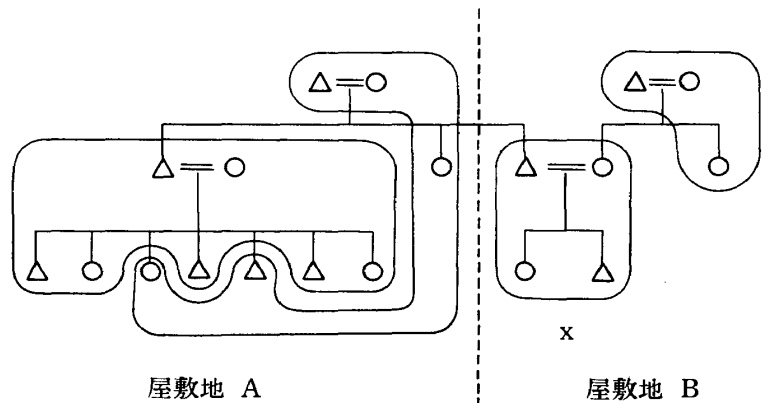


図8 複世帯家族の重複

3.9と増加する。

CG4は、いとこ、ふたいとこ関係を中心とした世帯群で、屋敷地の所有名義はCG2の段階のきょうだいの共有名義のままにしてあり、いとこのレベルの所有農地面積の平均は1.08 relong (0.29 ha)で、平均の世帯数は4である。

以上のCG2~4の世帯群の親族関係は、実際はかなり複雑なものであるが、複世帯家族の場合と同様に、マレー人の近い親類(kindred)の範囲内の実際の共同のあり方を示している。マレー語のきょうだい(adik beradik)を意味することだが、同時にegoを中心に親子きょうだいを通じて広がる親類をも意味する。親類は近いもの(adik beradik dekat)と遠いもの(adik beradik jauh)に莫然と区分されるが、近いものは自己を中心にして、上は曾祖父母、下は曾孫、同世代はふたいとこまでの範囲を指す[同上書:78-79]。この範囲の親族のネットワークは義理の親子やきょうだいをも吸収するが、それは親族関係を認知するための社会的カテゴリーにすぎない。したがって、このカテゴリーによって直ちに輪郭の明白な集団は生れない。近い親類同志は、相互に助け合うことが期待されており、近い親類は、事情が許せば、互いに相互の独立性と互惠性を尊重しながら助け合う。しかし、誰と誰が相互に助け合うかは、

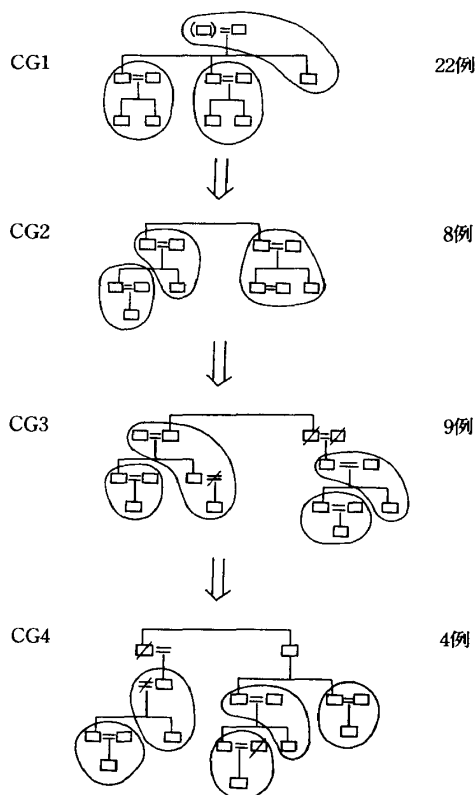


図9 屋敷地(親族)世帯群の類型と発展段階

個人の好みや選択の問題である。

複世帯家族の場合と同様, 親類の場合にも, 具体的な結合関係をもたらす重要な要因は居住の近接性である。日常生活における共同の機会の頻度が高ければ高いほど, 親類の関係は深まる。関係の認知には, 記憶, 日常的面接, 共通の利害が重要であると Raymond Firth はクランタンのマレー人の親族関係について指摘しているが [Firth 1974: 37], ケダーについても同様のことがいえる。

IV-5 家族圏というのは認知の枠組であって, 実際の生活共同単位とは同義ではない。いわば間柄の論理によって概念化された家族なのである。また, 集団としての, 核家族, 拡大家族といった見方とはレベルを異にする。家族圏を拡大家族と混同している批判 [Mohd. Dahlan 1978: 247; 老川 1980: 93] もあるが, いわゆる Notes & Queries や Murdock の定義する拡大家族やステム・ファミリーは集団としての枠組をもっており, 我々はむしろ, すでに引用した Hanks のように, family ということば自体の集団性をも避けようとしているのである。

家族圏のどの部分を切り取って, あるいはどんな外部要素を取りこんで生活共同単位を編成するかという視点 [清水 1979: 222] はきわめて重要であるが, 問題となるのは家族圏の「メンバーシップ」ではなくて, 生殖単位, 経済単位, 居住単位という現象形態が家族圏の概念によってどこまで明らかになるかということである。生活共同単位を観察して家族圏を抽出し, その家族圏で生活共同単位を説明するというのは明らかにトートロジーである。我々は一方は行為の規範のレベルであり, 他方は文化カテゴリーのレベルであると考え, 両者は相互に影響し合うが完全に1対1の対応をなすのではなく, 概念的に別のレベル(order)にあると考えることにより, こ

のトートロジーの呪縛から逃れたいと願う。

同様に, 家族と親族という区分を索出的にそのまま対象社会にあるものとして適用してしまう危険にも注意しておきたい。家族と親族という制度によって考えること自体が一種の文化的偏見とならないとは保証できない。

V お わ り に

水野の提起した, 家族周期において捉えられた屋敷地共住結合は, 第Ⅲ章において引用された最近のタイ研究に引きつがれ発展されている。その動きの中で, 屋敷地共住結合を1個の組織体とみずに, 家族現象における1変形とみなす傾向 (Keyes, Potter) は, 一方では全然別の親族集団の存在を強調する傾向 (Turton, Davis) とともに, ますます強くなってきている。タイ社会研究者の間での家族と世帯との混同は, かまどを意味するクローブ・クルアというタイ語に由来するのかもしれない。しかし, タイ人の考え方の中に家族と世帯とが同義であるという考えが普遍的にあるとすれば, 世帯を別にする家族からなる結合体である屋敷地共住集団は, Potter や Keyes のいうようにその結合体自体を一つの家族または世帯のメンバーとはとれず, 個々の家族=世帯に分けて考えねばならない。にもかかわらず, Keyes は, 村人にとって, 従属的な世帯はその親の世帯の一部とみなされていると報告している(上記Ⅲ-1)。Keyes は, 戸別調査をしている時にそのことを発見し, のちに村役場での出生・死亡記録から確認されたとし, Potter は, 証拠はあげていないが, 屋敷地共住結合が村人の理想型であるのは, 文化的に定義され, 規範的に規定されているという。水野は, 共同生産と別世帯を屋敷地共住結合の指標としており, 初期にはそれを拡大家族の変形とみていたのが, 後期には家族・親族とならぶ一つのカテゴリーとしてみるに至っている。いずれにしても, 統計的に核

家族的世帯が多いか、拡大家族的世帯が多いかという問題、規範的にタイ人がどちらの家族＝世帯に志向するかという問題、タイ人にとって家族・親族と呼ばれる制度にひそむ象徴的意義は何かという問題、この三つの問題のレベル (order) の差異にわれわれは十分注意したい。

II-7, II-8, および III-4で明らかにしたように、屋敷地共住結合というのは、規範構造としての制度である。その集団編成原理となっているのは *entourage* 的な二者関係である。¹⁵⁾ 比較していえば、マレー社会では *entourage* 的要素の少ない二者関係である。したがって、屋敷地世帯群を形成していてもタイに比べて、その構成はより状況依存的、選択的である。そこでは自己の準拠枠が集団にあるのではなく、互酬性、間柄、対人関係に置かれている。それが家族圏の *flexibility* の基盤でもある。対人的均衡関係の維持と夫婦結合を核とするという通文化的な価値に加えて、タイ社会においては「ともに働きともに食べる」(*hed nam kan kin nam kan*) こと、マレー社会では親子のキズナ (*keturunan*) が家族圏の中核にある。タイにおいて系譜的關係がより強く現われてくるのは女非移動制の原則がより貫徹した形で現われてくるからにすぎない。その意味で、「妻＝母方的要素の濃厚なる双系制の原理」というよりは、「妻＝母方的要素」そのものと、親族核の放射的拡大の原理とであり、この両者が矛盾なく共存できるところにタイ社会の特質があるといえそうである。あるいは、親族核の放射的拡大という一つの文化的志向性に、女非移動性という別の文化

的志向性が、その拡大のありさまを現象的に限定しているが、意識の存在形態としては、二つともそこにあると考えてもよい。家族圏と呼ぶのが妥当であるか否かは別として、タイ社会あるいはマレー社会の理解は、屋敷地共住集団から説明するのではなく、家族圏からアプローチしていく方が、問題の本質により近似していくのではないかと、水野の学的遍歴はわれわれに訴えているように思える。¹⁶⁾

引用文献

- Davis, Richard. 1973. Muang Matrilocality. *Journal of the Siam Society* 61 (2): 53-62.
- Firth, Raymond. 1974. Relations between Personal Kin (*waris*) among Kelantan Malays. In *Social Organization and the Application of Anthropology*, edited by R. J. Smith, pp. 23-61. Ithaca: Cornell University Press.
- Geertz, Hildred. 1979. The Meaning of Family Ties. In *Meaning and Order in Moroccan Society*, jointly written with C. Geertz and L. Rosen, pp. 315-506. Cambridge: Cambridge University Press.
- 浜口恵俊. 1977. 『「日本らしさ」の再発見』東京：日本経済新聞社。
- Hanks, Lucien M. 1972. *Rice and Man: Agricultural Ecology in Southeast Asia*. Chicago: Aldine.
- . 1975. The Thai Social Order as *Entourage and Circle*. In *Change and Persistence in Thai Society*, edited by G. W. Skinner and A. T. Kirsch, pp. 197-218. Ithaca and London: Cornell University Press.
- Hanks, Lucien M.; and Hanks, Jane R. 1964. Siamese Tai. In *Ethnic Groups of Mainland Southeast Asia*, edited by Frank M. Lebar *et al.*, pp. 197-205. New Haven: HRAF Press.

15) 父系出自集団のあるモロッコにおいても、その家族は二者関係からなりたっているという分析もある [Geertz 1979]。蛇足ながら、*圏*というのは関係と同義ではない。家族が二人関係から成立しているのであれば、家族関係ということばを使えばよいのであるが、それでは家族としてまとまりのある面が出てこない。累積態という面を強調するために*圏*を使う。

16) 当初、口羽と前田とは別個に論文を用意していたが、テーマが同一であったことから一つの論文としたものである。坪内・前田 [1977] の共同執筆者である坪内をも加えて、家族圏概念に対する批判に答えることも考えたが、坪内がアメリカに長期出張中で共同執筆者として名を連ねられなかったのが、家族圏概念についてはたち入って論議しなかった。しかし、上掲書に含まれていなかったケダー州の事例を本論文で提示することにより、いくらかでも家族圏概念が明らかとなったことを祈る。なお、坪内からは、本論文の一部に対して貴重なコメントをえたことを付記しておきたい。

- Keyes, Charles F. 1975. Kin Groups in a Thai-Lao Community. In *Change and Persistence in Thai Society*, edited by G. W. Skinner and A. T. Kirsch, pp. 278-297. Ithaca and London: Cornell University Press.
- 口羽益生; 坪内良博; 前田成文 (編). 1976. 『マレー農村の研究』東京: 創文社.
- Kuchiba, Masuo; Tsubouchi, Yoshihiro; and Maeda, Narifumi, eds. 1979. *Three Malay Villages: A Sociology of Paddy Growers in West Malaysia*. Translated by Peter and Stephanie Hawkes. Hawaii: The University Press of Hawaii.
- 馬淵東一. 1971. 「解説」『沖縄文化論叢』第3巻. 東京: 平凡社. 『馬淵東一著作集』第1巻, 517-521ページに再録. 東京: 社会思想社.
- メイヤスー, C. 1977. 『家族制共同体の理論——経済人類学の課題』川田順造; 原口武彦 (訳). 東京: 筑摩書房. (原著 Maillassoux, Claude. *Femmes, Greniers et Capitaux*. Paris: François Maspero.)
- 水野浩一. 1965 a. 「農地所有と家族の諸形態」『東南アジア研究』3(2): 7-35.
- . 1965 b. 「ラオ・タイ村落の世帯共同体」『共同体の比較研究』第3輯, 51-66.
- . 1967. 「日本とタイの農村社会——女性の地位」『京都府立大学学術報告・人文』19号, 83-99.
- . 1968 a. 「階層構造の分析」『東南アジア研究』6: 244-260.
- . 1968b. Multihousehold Compounds in Northeast Thailand. *Asian Survey* 8: 842-852.
- . 1969. 「東北タイの村落組織」『東南アジア研究』6: 694-710.
- . 1971a. *Social System of Don Daeng Village: A Community Study in Northeast Thailand*. CSEAS Discussion Paper Nos. 12-22. The Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University.
- . 1971 b. 「家族の周期と村落構造」『ソシオロジ』17 (1・2): 219-231.
- . 1973. 「東南アジアの村落研究——社会・人類学的観点」『東南アジアを考える』市村真一 (編), 157-188ページ所収. 東京: 創文社.
- . 1974. 「工業化と村落の変貌 (Ⅲ)」『東南アジア研究』12: 211-231.
- . 1975a. 「稲作農村の社会組織」『タイ国——一つの稲作社会』石井米雄 (編), 46-82ページ所収. 東京: 創文社.
- . 1975b. 「タイ人の家族と宗教」『アジア文化』11(4): 35-49.
- . 1976. 「家族・親族集団の国際比較——タイ国と日本」『社会学評論』26(3): 90-109.
- Mohd. Dahlan Hj. Aman. 1978. Comments on "The Malay Family as a Social Circle" by N. Maeda. *Tonan Ajia Kenkyu* [Southeast Asian Studies] 16: 245-248.
- 老川 寛. 1980. 「書評 坪内・前田著『核家族再考』」『社会学評論』30(4): 91-93.
- Potter, Jack M. 1976. *Thai Peasant Social Structure*. Chicago: University of Chicago Press.
- Potter, Sulamith Heins. 1977. *Family Life in a Northern Thai Village: A Study in the Structural Significance of Women*. Berkeley: University of California Press.
- Sakuta, Keiichi. 1978. Social Aspects of Endogenous Intellectual Activity: Principles of Group Formation in Japan. Paper presented at Asian Symposium on Intellectual Creativity in Endogenous Culture, jointly sponsored by the United Nations University and Kyoto University, 13-17 November, 1978, Kyoto, Japan.
- Sharp, Lauriston; and Hanks, Lucien M. 1978. *Bang Chan: Social History of a Rural Community in Thailand*. Ithaca & London: Cornell University Press.
- 清水由文. 1979. 「ほん: 坪内・前田著『核家族再考』」『季刊人類学』10(2): 218-226.
- Smith, Harold E. 1973. The Thai Family: Nuclear or Extended. *Journal of Marriage and the Family* 35(1): 136-141.
- Tambiah, S. J. 1970. *Buddhism and the Spirit Cults in North-east Thailand*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 坪内良博. 1972. 「東海岸マレー農民における土地と居住」『東南アジア研究』10: 60-76.
- . 1974. 「クランタンの二つの農村——町に近いむらと遠いむらとの比較」『東南アジア研究』11: 485-496.
- . 1980. 「タイ農村研究への視角——故水野浩一教授の業績をめぐって」『東南アジア研究』18: 175-185.
- 坪内良博; 前田成文. 1977. 『核家族再考——マレー人の家族圏』東京: 弘文堂.
- Turton, Andrew. 1972. Matrilineal Descent Groups and Spirit Cults of the Thai-Yuan in Northern Thailand. *Journal of the Siam Society* 60(2): 217-256.